

FLOSSCOMI-Cマンガ大賞 オリジナルマンガ作画部門シナリオ

著…穂菓つみき

□…台詞

○…モノローグ

○…場所や物などの固有名詞／時間経過の明示／その他

■登場人物

主人公…花井萌（はない・もえ） 18歳／大学1年生／自分を低く見積もりがちな性格

ヒーロー…海野太陽（うみの・たいよう） 18歳／大学1年生／明るく外向的な性格

■あらすじ（前提）

大学デビューを果たした萌は、大学の食堂で高校時代の同級生・海野くと再会する。海野くんは、当時学内でも目立つ人気者で、冴えない萌をなぜか何度もデートに誘ってくれた相手だった。しかし、萌の転校をきっかけに彼からの連絡は途絶えてしまう。それは、萌の中に苦い初恋の記憶として、わだかまりを残していた。

○大学 食堂（昼ごろ）

定食をおぼんにのせ、込み合う食堂を歩く萌。
空席を探してきよろきよろしている、騒がしいグループの一人と目が合う。

【目が合っただけなのに】

【まるで、過去に引き戻されるような】

【そんな瞬間だった】

次の瞬間、萌は反射的に視線を外し、逃げるように背を向ける。

萌（なんで、海野くんがここにいるの!?)

挙動不審になりながら、食堂の隅の目立たないテーブルに座る萌。
ドキドキする胸を押さえ、深呼吸をして、ふと我に返る。

萌（つい反射的に逃げちゃったけど、その必要はないんだった）

大学デビューを果たした萌、高校時代の自分と今の自分を思い浮かべる。

萌（気づかれるわけがないのに、余計なことしたなあ）

頬の熱が引き、少し冷静になると、じわりと後悔がこみ上げる。
それをごまかすように箸を手に取り、ご飯を食べ始める。

萌から見えない席では、海野が友人に声をかけ、席を立つ。

萌（おかしい、海野くんの姿が頭から離れなくなってる）

萌（…なんか、さらにかっこよくなってるな）

高校時代から成長した海野の姿に、胸がきゅっと締めつけられる萌。
すると背後に人の気配を感じ、振り返ろうとした瞬間、横から顔を覗き込んでくる人影。

海野「やっぱり萌ちゃんだ」

海野「久しぶり！」

突然現れた海野に、思わず咽ひせてしまう萌。

海野は萌の背中を優しくさすり、落ち着いたところで隣に座る。

海野「ごめんね。びつくりさせたよね」

萌「な、なんでっ……！」

海野「いやー、まさか同じ大学に進んでたとは思わなかったけど」

海野「でも、また萌ちゃんに会えてうれしい」

萌（いや、それもだけど……）

萌（あの一瞬で、どうして私だって気づいちゃうの!?!）

動揺して、思わず箸をぎゅっと握りしめる萌。

すると、高校の頃と変わらない、人懐っこい笑顔を向ける海野に警戒心が芽生える。

萌（あ、これ……やばいかも）

萌（なんか、この感じ覚えがある）

海野「ねえ、萌ちゃん。俺とデートしてくんない?」

高校時代、同じセリフで萌をデートに誘ってくれた海野の姿が重なった。

しかし、連絡が途絶え、スマホを握りしめて泣きそうになっている自分の姿まで思い出してしまっ。

一瞬の沈黙のあと、手に持っていた箸が滑り落ち、はっと我に返る。

萌「……ごめん……無理かな」

慌てて荷物とおぼんを抱え、その場から逃げ出す萌。

ぼつんと、その背中を見送る海野。

○大学 構内（夕方）

午後の授業を終え、友人に手を振りながら校舎を出る萌。

そのまま校門へ向かって歩き出す。

一人になると昼の出来事を思い出してしまい、表情が険しくなる。

萌（海野くん、なんで今更、あんなこと言ってきたんだろう）

なんとなくスマホを開き、海野の連絡先を表示する萌。
そのとき後ろから強く腕を引かれ、体がつんのめる。

海野「萌ちゃん！」

萌「わっ…」

振り返ると、息を切らし、汗をかいている海野の姿。
膝に手をつけて必死に呼吸を整えている。

萌「海野くん!？」

海野「ごめ：急に引っ張って」

海野「話があって…っ」

咽せながら話す海野に、萌は慌ててカバンの中を漁り、目についたペットボトルを差し出す。

萌「大丈夫？ とりあえず、よかつたらこれ飲んで」

ペットボトルを受け取り、遠慮なく喉を潤す海野を見ながら、気まづくなりそつと視線を逸らす萌。

やがて呼吸が落ち着いた海野が、深く息を吐く。

海野「萌ちゃんが見えて、あそこから全力で走ってきた」

萌「え」

萌（あんな遠くから…!?)

海野が指さした先を見て、目をまん丸にする萌。

海野「さすがにちよつとキツかったわ」

海野「これ、サンキュ。助かった」

萌「あ、うん…！」

返されたペットボトルを受け取ると、海野の視線が萌の手元のスマホに注がれる。画面に、海野の連絡先が表示されたままだと気づき、慌ててスマホを隠す萌。

萌（やば…今、絶対見られたよね…）

萌「えーと…それじゃ、落ち着いたみたいだし、もう行くね」

萌は、ぎこちなく愛想笑いを浮かべ、その場を離れようとする。しかし、海野がその腕をそっとつかんで引き止める。

海野「…連絡先、とつくに消されてると思った」

その言葉に、しばらくクエスチョンマークを浮かべる萌。

萌「…どうして?」

海野「だって萌ちゃん、何度デートに誘っても、一度も返事くれなかったから」

戸惑った顔をする海野に、苛立ちを隠せなくなる萌。

萌「それは、私のセリフでしょ!？」

服の裾をぎゅっと握りしめ、やるせない気持ちを抑える萌。

その様子を見ていた海野、思い当たることがあり、頭を抱えてしゃがみこむ。

海野「あ〜…！」

海野「萌ちゃん、もしかして俺のこと…ブロックしてる!？」

思わず目を逸らす萌と、やっぱりという顔をする海野。

海野「ちょっと、言い訳させて。俺、萌ちゃんが転校した直後にスマホ壊しちゃってさ」

海野「しばらくスマホなし生活してた」

海野「それで、新しいスマホに変えてから、すぐ連絡もした」

萌「うそ…！」

突然立ち上がった海野が、萌の手を取る。
距離が一気に縮まり、思わず固まる萌。

海野「…俺たち、実はかなりすれ違つてない？」

萌（へ……？）

つかまれた手首を、指先でそつとなぞられ、萌は思わず息を呑む。

萌（近すぎて、頭回んな…）

海野「萌ちゃん」

海野「今度はいい返事をもらえるまで、俺に口説き直させてよ」

海野の怒濤どたうの勢いに、恥ずかしさと戸惑いが一気にこみ上げ、落ち着かなくなる萌。
横を通り過ぎる生徒たちの視線や、冷やかしの声が気になり、さらに追い詰められていく。

萌「わ、分かったから…ちよつとストップ…！」

海野「無理、今逃がしたら、またこじれる気がする」

萌（その前に、私がこの距離に耐えられない）

萌「大丈夫だから…！」

海野の顔を正面から見てしまい、ドキッとする萌。

萌（だつて）

勇気を振り絞り、海野の目をまっすぐ見つめ。

萌（きつと、再会したあの瞬間から）

萌（いや、もしかしたら、ずっと前から）

萌「返事は決まってるの、海野くん！」